

読書への誘い^{いざな}

河合文化教育研究所 所長 木村 敏

本を読むということには、どんな意味があるのだろうか。それは私たちの心に何をもたらすのだろうか。

たくさん本を読めば確かに知識は増える。また本を読むことによって今まで知らなかった未知の世界を垣間見ることできる。それはもちろん望ましいことだろう。しかし現在のネット社会の時代には、知識も瞬間的な体験もネットから手軽に得ることができるともいえる。だが、そこから得ることができるような断片的な知識や表層の経験をどれだけ数多く寄せ集めても、人生を豊かにしてくれる「教養」というようなものは身につかない。

教養とは、私たちの心を深く耕すものことである。ひとまずこう言ってもいいだろう。それを通して、幅広い視野や洞察力、深い思考力が生まれ、そこから私たちは世界を見る目を養うと同時に、また「自分とは何か」、「生きることは何か」といった根源的な問題を考えることができるようになる。そうすると、この世界のうちに自分一人では存在することができないこと、自分が自分であるためには必ず他者の存在が必要になってくることもわかってくる。生きるとは、世界のうちで、互いに傷つきやすく脆い身体をかかえながら、他者と支えあい交流しながらともに存在することである。その自覚のなかから、他者に対する想像力も生まれてくる。そのことが私たちの心をいっそう豊かなものにしていくのである。

では、教養を自分の中で培うには、つまり心を耕すにはどうしたらよいのだろうか。それは、良い本を読むことである。良い本とは、ある時代のある場所に生きた書き手が、彼が生きた時代の矛盾に向き合い格闘し、苦しみ考えながら自己の内的必然性に促されるようにして書いた本のことだと言ってもいいだろう。そうして書かれた本を、ゆっくり時間をかけて読む。そうすることによって読者は、いつの間にか書き手が生きている、その人だけの世界に入り込むことになる。本の書き手の生きているこうした世界こそが、一つひとつの知識や情報を、目に見えないかたちで背後からつなぎ、読む者の心に奥行きを与えてくれるような意味を発酵するのである。

ある人が歳月をかけてつくりあげたその人だけの世界に、時間をかけて持続的に住み着き、彼の体験や思考をその内側から自分の中に取り入れるということになると、やはり読書以外に手段はない。すぐれた書き手の世界を深く体験することで、読者の心は豊かになり、さまざまな感性が磨かれていく。こうしたことのすべてを教養だといってもいいかもしれない。そしてその教養はまた、この社会の矛盾がどこから生まれてくるか、その社会と自分との関係についての認識をも促し、同時に、遠くで困窮の中にいる見えざる他者へのまなざしをも深くする。それは、この社会の矛盾への批判精神を養うとともに、振り返ってその中で自分の位置とありようを対象化し、他者としていねいに向き合おうとさせもする。

こうした意味での教養の培養を願って、若いみなさんの心に届けたいと願って作られたのが河合文化教育研究所の本冊子『わたしが選んだこの一冊』である。2010年の創刊からこれまで9年間にわたって発刊し、その総計は60万部を超えることになった。多くの若い読者に支えられてきたお蔭である。9号までは、河合文化教育研究所の主任研究員や河合塾の講師たちが、自分の人生の中で深い影響を受けた特別な本を選び出し、短いながら熱い思いを込めて諸君に向けて書き綴ってきたものを編集して作ってきた。

前号からは、従来のその形の枠を拓けて、河合文化教育研究所のシンポジウムや研究会、講演会、出版などに私たちと同じ志と問題意識をもって関わっていただいた外部の方々に依頼して、その人たちの特別な一冊について書いていただくことになった。お蔭様で、多くの執筆者の方々から心のこもった刺激的な原稿をお寄せいただくことができた。この場を借りてお礼申し上げたい。

ある時代にのつびきならない思いを込めて書かれた著者の本を、別の時代に読んで心を動かされた推薦者が、新しい時代に生きる若い人にさらにその本を手渡していく。そうしたいわば「教養」のリレーを果たそうとしたのが、『わたしが選んだこの一冊』である。そのリレーが、このような形でつながり広がってきたことを喜びたい。

教養は受験には直接の役に立たないと思われるかもしれない。しかし教養は手持ちの知識を有機的につないで、知識の量よりもその質を高め、そして諸君の世界に対する認識力を掘り起こし、ひいては思考をも強靱に鍛えてくれる。それは深いところで、諸君を大きく変え、受験という人生の関門を突破していく力をもつけてくれる。

塾生の諸君に良質の読書をお勧めするのは、まさにそのためである。

もくじ

読書への誘い^{いざな}..... 1

《推薦図書》	《推薦者》	
『注文の多い料理店 宮沢賢治全集8』 宮沢賢治 著	安藤隆穂	4
『タイムマシン』 H・G・ウェルズ 著 池 央 耿 訳	池田浩士	5
『人間不平等起源論 付「戦争法原理」』 ジャン=ジャック・ルソー 著 坂倉裕治 訳	伊多波宗周	6
『ある韓国人のこころ 朝鮮統一の夜明けに』 鄭 敬 謨 著	林 炳 澤	7
『日本の民家』 今 和 次 郎 著	内山 節	8
『金閣寺』 三島由紀夫 著	内海 健	9
『壁の向こうの住人たち アメリカの右派を覆う怒りと嘆き』 A・R・ホックシールド 著 布施由紀子 訳	江原由美子	10
『ルポ 川崎』 磯部 涼 著	大岡 淳	11
『隠された十字架 法隆寺論』 梅原 猛 著	大澤真幸	12
『家事労働ハラスメント——生きづらさの根にあるもの』 竹信三恵子 著	海妻怪子	13
『植民地がつくった近代 植民地朝鮮と帝国日本のもつれを考える』 尹 海東 著 沈 熙 燦・原 祐 介 訳	桂島宣弘	14
『古都の占領 生活史からみる京都 1945-1952』 西川祐子 著	金津日出美	15
『断影 大杉栄』 竹中 芳 著	熊野純彦	16
『永遠のファシズム』 ウンベルト・エーコ 著 和田忠彦 訳	栗原幸夫	17
『世界リスク社会論 テロ、戦争、自然破壊』 ウルリッヒ・ベック 著 島村賢一 訳	佐幸信介	18
『資本論 全9巻』 カール・マルクス 著 向坂逸郎 訳	佐藤 隆	19
『樹魔・伝説』 水樹和佳子 著	佐藤泰弘	20
『ジハード主義 アルカイダからイスラーム国へ』 保坂修司 著	佐原徹哉	21
『天皇陛下萬歳 爆弾三勇士序説』 上野英信 著	島 蘭 進	22
『増補日本語が亡びるとき 英語の世紀の中で』 水村美苗 著	白井 聡	23
『朝鮮人学徒出陣 もう一つのわだつみのこえ』 姜 徳 相 著	慎 蒼 宇	24
『これが人間か 改訂完全版 アウシュヴィッツは終わらない』 プリーモ・レーヴィ 著 竹山博英 訳	慎 蒼 健	25
『ビリー・バッド』 H・メルヴィル 著 飯野友幸 訳	高橋若木	26
『現象学』 新田義弘 著	谷 徹	27
『蒼ざめた馬を見よ』 五木寛之 著	張 承 志	28
『蠟燭の焰』 ガストン・バシュラル 著 澁澤孝輔 訳	野間俊一	29
『月』 辺見 庸 著	林 真 理	30
『科学の危機と認識論』 廣松 渉 著	廣野喜幸	31
『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』 保 莉 実 著	堀江未央	32
『「難死」の思想』 小田 実 著	松井隆志	33
『室町幕府と地方の社会 シリーズ日本中世史③』 榎原雅治 著	元木泰雄	34
『増補 国境の越え方 国民国家論序説』 西川長夫 著	横内裕人	35
バックナンバー.....		36

河合文化教育研究所

- 河合文化教育研究所について 42
- 主任研究員 44
- 出版 河合ブックレット・単行本 49
- 研究会紹介 51
- 主任研究員の著書から大学入試問題が出題！ 52



注文の多い料理店

宮沢賢治全集8

みやざわけん じ
宮沢賢治 著

ちくま文庫 [定価: 本体1,000円+税]

推薦 安藤隆穂 (あんどう・たかほ)

中部大学教授、名古屋大学名誉教授。専攻：社会思想史研究、特にフランス自由主義研究。『フランス自由主義の成立』で日本学士院賞受賞（2009年）。著書：『フランス啓蒙思想の展開』（名古屋大学出版会）、『フランス自由主義の成立——公共圏の思想史』（名古屋大学出版会）など。

宮沢賢治が生前刊行した唯一の童話集です（1924年）。ここでは表題にもなった「注文の多い料理店」についてのみ述べますが、同書所収の全童話とともに、できれば『宮沢賢治全集』全体を思い描きながら読んで下さい。感動を消費する人間になるなど諷刺め、現実を思考する態度を励ましてくれます。「幻想が向ふから迫ってくる時はもうにんげんの壊れるときだ」（「小岩井農場」パート九）と。

賢治の広告文に「糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感」とあります。舞台は1920年代の貧しい農村の晩秋の森です。産業革命と資本主義と帝国主義（英国風紳士とその言葉）に生活と命を取奪され破壊される民衆の悲痛な叫びが屈折して表現されています。（日清戦争1894年、官営八幡製鉄所1901年、日英同盟02年、日露戦争04年）

小学生の私は山村生まれ（1949年）でもあり、都会への「反感」を素朴に共有し、山猫による英国風紳士の処罰を期待し、この童話を読みました。ところが、紳士が救助された時、逆に安堵し憎しみの心が消え、自分が人間に戻ったと感じたのです。笑いを運ぶ表現力と文学の不思議な力に出会った瞬間でした。

中高生になり古文や星座を学び、戌や酉や兎が西北、西、東という方位を示すと知りました。これら命の羅針盤である存在を、紳士が都会風に扱い値段をつけ貶めたので、世界はカオスに陥ったのでした。二匹の「白熊のやうな犬」はまず二つの「くま座」を連想させ、そこには北極星があるのですから、犬の気絶は世界の中心の喪失を意味します。さらに、二つの「いぬ座」のギリシャ神話にてらせば、秩序の転倒をも暗示します（「こいぬ座」：鹿と犬の位置逆転）。だから、生活世界を壊された村びとの行き場のない反感が、RESTAURANT（命を料理する場所）：WILDCAT HOUSE（化け猫屋敷）を生み出すのです。蹂躪された存在に救いはあるのか。童話は私に哲学的思考を促しました。やがて私は、この場面を思いながら、ダンテの『神曲』（特に冒頭の類比）にルネサンスの意味

を尋ね、マルクスの宗教批判に（疲弊する）「民衆のため息」を聞いたのでした。

都会の羅針盤はお金です。紳士には、可愛い「山猫」の経営するお洒落な「西洋料理店」という都会風景しかみえません。

大学生になりマルクスの『資本論』を読み、市場ではお金で注文するとお金に注文されて人間の主体性を奪われると教えられ、「西洋料理店」の場面が、「山猫」に注文すると WILDCAT に注文されるという形で、お金を富とする人間と経済の転倒と悲惨とを見事に描いていると感嘆しました。印象深いのは、恐怖と失敗を泣くのみで、涙もルネサンスの産湯にならない人間が造られることです。紳士には許しも希望も訪れません。「くしやくしやの紙屑」（紙幣？）のような顔は治癒しません。敗戦時、戦争指導者の多くが同じ涙を無責任に流しました。

私が大学に入学したのは1968年です。東西冷戦の矛盾が爆発し、経済は自然を破壊していました。新日米安保条約（1970年）が米国風紳士の時代を導きました。私は、日英同盟を日米安保条約に、「山猫軒」を水俣の公害の予兆となった猫の病死に繋げ、歴史の書として、賢治の童話に再会しました。「山猫軒」が民衆の苦悩の心象風景だとして、歴史的現実には彼らの救いの未来は在りえたか。復活した「白熊のやうな犬」はファシズムを予感させないか。それでも、「白熊のやうな犬」や猟師の回帰が描かれたことの根拠を、歴史具体的に探していこう。人間を取り戻した小学生の私を忘れずに。童話は、未来を模索する私を、歴史学や社会科学へと誘いました。

賢治は、非人間的なものを告発し、なおかつ人間嫌いを誘発しません。紳士も WILDCAT も実は私のことではないかと怖くなり逃げ出したくなる時も、そこに踏みとどまり自己の現実を見据えようとする力がユーモアを伴い湧いてきます。賢治の童話は、すべての存在の幸せへの祈りを響かせ、私たちに文学的想像力という宝物を贈り、歴史や社会の現実希望を求めよと励まします。